ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（8）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
（代表　森　　昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行の Johannes Pauli: Schimpf und Ernst 第303話—第358話である（第302話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，第4号，第33巻第2号，第4号，第34巻第2号に所載）。使用テキストは1924年刊の Johannes Bolte 編（リプリント版1972年）を用い，適宜 H. Österley の版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch 研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1994年1月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第303話—第307話	中条	第329話—第335話	大沢
第308話—第312話	橋本	第336話—第339話	森
第313話—第319話	森	第340話—第346話	木野
第320話—第324話	山田	第347話—第352話	精園

第325話―第328話　青木　　第353話―第358話　中条

第三百三話　まじめ
赤い色の僧帽を着用しようとしなかった修道士のこと

ある貴族が，人の好い単純な人間であった修道士をお客に招きました。そして修道士に，「わしはあなたに告解したい」と言いました。その司祭は，「領主様，あなたの告解を聞きませんよ。私はあなたにとっては未熟すぎます。学者で，もっと経験豊かな方を探して下さい」と，言いました。領主は，「あなたにどうしても，わしの告解を聴いて貰いたい」と言いました。この司祭は，「もしあなたの告解を聴かなければならないのなら，前以て一例を申し上げましょう。その後でお好きなようにして下さい」と，言って話をつづけました。「昔一人の領主がいました。その方も聴罪司祭を持っていました。この司祭は，領主が言ったことを認め，軽々しく赦免を与えて，当然なすべきであった通りに彼に罰を科しませんでした。この貴族は，死んで教会の中へ葬られました。その後ある時，この司祭は弟子を連れて教会の中を歩いていました。その時，その貴族の墓が動いているのを見ました。それが何であるか見ようと墓の傍へ来た時，墓の中の人が腕を伸ばし，その司祭の僧帽と首をつかみ，司祭の耳の上方の皮膚をむしり取って，こう言いました。『あちらへ行って，この印をわしの妻と子どもたちに見せてやってくれ。そうすればこのわしがどんな場所にいるか分かるだろう。それにあなたは，私が告解した時，わしに真実を言わなかったので，わしの堕地獄に責任がある。だからあなたも罰の一半をわしと分かつべきだ。』領主様，それでもお望みならば，私に告解して下さい。しかし知っておいて頂きますが，私は貴方のために赤い色の僧帽をかぶるつもりはありません。」そこで貴族は言いました。「そんなら刑吏の手下が，お前に告解するよ。このわしにお前はひどい仕打ちをするつもりなのか。」貴族はこうしてその修道士に告解しようとは思いませんでした。

多くの聴罪師のやり方は，怠惰な浴場主の場合と同じです。浴場主が人の頭を洗ってやる時，その人の身体をきれいに洗ってやることに注意を払いません。特に客の頭に，かさぶたができていたり，浴場に浴客が大勢い

たりするとそうです。浴場主が注意を払うのは，効率をあげて風呂銭がたっぷり入るようにすることだけです。このように聴罪師の多くは，人々にその罪の訴えをする時間も暇も与えません。そして言います。「一番大きな事柄だけ話しなさい。」それと共にこのことから，司祭たちに金が多くたまるように，多くの人に罪の赦しを告げるということになります。もし浴場主がゆっくり灰汁を注ぎかけて，頭を泡立たせると，浴場主は長い間拘わらねばならない。さもなければ，浴場主は手桶一杯，いきなり注ぎかけて手早く片付けてしまいます。聴罪師もこんな具合です。遅くなって告解する人々は，自分たちが損をする，つまり遅れて告解すれば，その人々は司祭を取りまいて立ち，誰もが一番を望むでしょう。こういう次第で，聴罪師も，あなたが一人でいる時の様に，教え諭す暇が無いのです。だから灰の水曜日や，そのような日に行けば仲々捗らないのです。もしも早くあなたが行けば，長い間待つ必要はありません。

第三十章　誓約と約束について

第三百四話　冗談

危難に際し，帆柱大のろうそくの寄進を約束した男のこと

海がすごい嵐に見舞われていました。誰もが命を落とさないように，神と聖者様に嘆願していました。その船の中には一人の遍歴職人もいました。この男は聖ニコラス様に叫びかけました。「おお，聖ニコラス様，我々を助け給え。私の太ももと同じ位の大きなろうそくを寄進申し上げます。」海は荒れ狂うのを止めませんでした。そこで彼はこう言いました。「我々を助け給え，聖ニコラス様。私は，私の身体の重さのあるろうそくを捧げます。」しかし効き目はありませんでした。そこで彼は言いました。「お助け下さい，聖ニコラス様。船の帆柱ほどの大きなろうそくを捧げます。」船の中に居合わせていた立派な人々が彼に言いました。「お前さんは馬鹿だよ。お前さんはそんなに沢山の蠟をどこで手に入れるつもりなんだい。たとえそれがちゃんと手には入ったとしても，代金を支払えないだろう。」その男が言いました。「お前さんたちが馬鹿だよ。わしがこの片足を乾いた陸地につけたら，ニコラス様がそれをもって寝に行くミサ用のろうそくなんか，

一本もあげやしないさ。」これから後に出てくる男もこの男に似ています。

第三百五話　冗談
雌牛と子牛を約束した男のこと

その男は，水害に見舞われて，聖者に一頭の子牛を捧げ，その後さらに雌牛を捧げることを約束しました。そしてその男が再び陸地に着いた時，彼はこう言いました。「貴方様には雌牛も子牛も捧げません。」大それた無知な人々はこのようなことをします。しかし後悔が彼らに後から次々にやってきて，もはや彼らになんの役にも立ちません。

第三百六話　冗談
手打ちの酒を飲まないと約束しようとしなかった女房のこと

ある農夫は女房を持ち，一匹のろばを飼っていました。ある時この女房には何か売り買いした場合は別として，ワインを飲まないという殊勝な気持ちが起こりました。そういうわけで女房は，手打ちの酒を飲むことを除外した積もりでした。つまり手打ちの酒を飲まないと約束したとは思っていなかったのです。こんな有り様で十四日間程すぎた頃，この二人はワインが飲みたくてたまらなくなりました。そこで女房が夫に言いました。「あんた，お前さんのろばを私に売っておくれ。」夫はそうして，二人は手打ちの酒を飲みました。その後暫くすると，夫がろばを買い戻しました。そこで彼らは再び手打ちの酒が飲めました。こうしたことを二人はいつまでも続けたのですが，これで誓約が破られたわけではありませんでした。

第三百七話　冗談
病人が癒えて，前より一層悪くなること

昔一匹の狼が食べ過ぎて体をこわしました。その狼はもう肉を食べないと，神に約束しました。この狼は肉を消化したとき，前と同じように食べました。だから，次のような諺は真実です。「病人が治ると，以前よりもひどくなる。」

第三百八話　冗談
ぶどう酒の入った樽を取りにやらせた男のこと

フェーリックス・ヘメルリン博士の書によると，博士がボローニャで学生であったとき，皇帝法を講じていた一人の博士がいました。そこに一人の貴族がいました。ドイツの貴族で，その博士の講義を聴いておりました。博士はその貴族を招待し，良いぶどう酒を振舞いました。貴族はぶどう酒の美味なのをほめました。博士は言いました。「殿，美酒がそんなにお望みなら，人を取りに来させて下さい。私は貴方や他のドイツの方々に聴講していただく栄誉を得ていますので，お気にめすのなら，ぶどう酒を樽でお送りいたしましょう。」貴族は礼をいって，家に帰ると下男に車を引かせて，博士のところへ樽入りのぶどう酒をもらいにやりました。博士は言いました。「それは社交辞令に過ぎません。こうしたことは誰をも拘束するものではありません。」Verba honoris neminen obligant.（社交辞令は誰をも拘束するものではない。）

法律家などは自分の嘘を Verba honoris（社交辞令）と言っています。フランシスコ・ペトラルカは言っております。 Sic michi credas, maganis promissoribus nil credas.（だから私の言うことを信じよ。貴方に多く約束をする人の言うことを，何も信ずるな。）「私の言うことを信じなさい。貴方に多く約束をする人の言うことを，何も信じてはだめです。」与える約束は名誉であり，与えることは百姓の卑しいことなのです。万一のときの縁者は，二十人も一ロート[1]の重さに過ぎず，助けになってもらうのには，六十人の縁者といえども一ロートの四半分にもあたりません。約束はたんまりしてもらえるものですが，それをかなえてくれる者をこそ捜しなさい。

1　Lot. 重さの単位，1ロートは10グラムから20グラム程度か。

第三百九話　まじめ
一人の子を神に捧げる約束したために，もう一人の子供も死なせてしまった男のこと

結婚して久しいある貴族の話を私はものの本でみました。この貴族には世継ぎの子がありませんでした。貴族とその妻は主なる神様に，子を授けてください，そして授かった最初の子は神様に仕えるようにさしだし，司祭にさせますと，約束しました。神様は願いを聞き入れて，夫婦には一人の男の子が，その後もう一人男の子が授かりました。そして二人の男の子は成長して，長男は可愛らしく，容姿端麗でした。もう一人はそれほど美男でも，愛らしくもなく，第一子のように世俗的でもありませんでした。そこで両親は二番目の子を僧にし，美男の長男は跡継ぎにするため，俗界に留めておこうと思いました。それ故神様は二人の子を死なせてしまいました。神様は可愛いものをもまた仕えさせたくないかのようです。

主なる神は昔の掟の中で，欠陥のある獣を犠牲にすることを禁じられました。それが私たちの掟では逆になっています。神様には，欠陥がなければ何も捧げません。あなたが歪んだ小銭を持っていると，言うものです。「司祭様は喜んで受けとってくださる。」十分の一税だって同じです。あなたに十人か十二人の子があり，誰か片目だったり，びっこだったり，せむしだったり，そのほかに欠陥があれば，その子は修道院へ入れられるにふさわしく，神様に捧げてしまいます。そのために他の者たちは，それだけ幸福が得られないのです。聖ニコラウス[1]の伝説にある，杯に関する一話がこれに似ています。

1　聖ニコラウス（350年頃没），ミラの司教。いろいろな伝説が伝えられているが，生涯については不詳。その伝説から，小児，学者，旅人，商人，教会などの守護聖人とされている。

第三十一章　師たる者について

第三百十話　冗談
作品をもっとうまく作ることができた男のこと

ある時ある師匠が，「作品をそんなにうまく作りたいとは思わない，もっとうまくできるだろうし，既に作ったものよりうまく作品を作ることはできるだろう」と言いました。その師匠はまた，「弟子には自分の芸の全てを教えはしなかった。自分の弟子たちがあまりに横柄になり師を蔑んでも，弟子たちよりもっと何かできるように，いつも何かを教えないでおいたものだ」とも，言いました。

この言葉は神様を讃える言葉に当てはまります。神様はご自身の技と力の全てを，神様の被造物や作品の中でお示しになっているわけではないと，私たちは思っているのです。私たちが理解できること，祭壇の秘蹟で毎日神様がなされていると思っていること，それよりもっと多くのことを，神様はおできになるものだと考えるのがよいのです。

第三百十一話　冗談
剣道師範が弟子の首を切り落としたこと

一人の剣道師範がいて，多くの町に道場を開き，よい弟子を，剣道師範を養成しておりました。しかし弟子の一人は特に腕がたち，自分をルチファーに比べて自慢し，自分の師の優れたところを何も認めようとはしませんでした。この師弟は互いに命を張って試合をしようと挑みあいました。どちらも全力を振り絞り，そしてその技の全てを使わなければならない羽目になりました。二人は広場に落ち合い，当時の慣例として観衆の前で試合をしました。落ち合って間もなく，師匠は刀を静かに構えて，弟子に言いました。「私は二人を相手に試合をするとは聞いていなかった。」この弟子は，誰が助太刀をしてくれるのだろうかと後ろを振り返りました。弟子が後ろを見ている間に，師匠は飛びかかって，その首を撃ち落として，言いました。「この打ち込みはまだお前に伝授してなかった。」

この師範は，師匠たる者は，弟子に何かを教えないでおかなければなら

ないという，前の話[1]の師匠と同じ様にしたわけです。

第三百十二話　まじめ
神様の援助を断念しようとしなかった男のこと

ある時二人の師範が互いにもめ事を決着せんものと，一方が，二人で果し合いをしようと提案し，自分が正しいので，神様の助けを借りて，相手に勝とうとしました。相手は言いました。「俺は弟の助けを借りて，おぬしをやっつけるつもりだ。」試合の当日になって，一方は武器を携えてやってきました。相手も武器を持って，弟を連れてやってきました。前者が言いました。「二人が一人を相手に，一人が二人を相手にするなどとは，国のしきたりや慣習からしてまだ聞いたためしがない。おぬしの弟に引きさがるように申せ。」相手は言いました。「そんなことはない。おぬしたちは二人で，俺たちも二人だ。おぬしと神様，弟と俺というわけだ。おぬしは神様の助けを借りて勝つと申したから，俺の方は弟の助けを借りてやるつもりだと申したわけだ。だからおぬしは仲間の神様の助けを断念するがよい。そうすれば俺も弟の助けを断念するつもりだ。」一方が神様の助けを断念しようとしなかったので，相手も仲間の助けを諦めるつもりはありませんでした。こうして双方とも家に帰ってしまい，何事も起こりませんでした。

第三百十三話　冗談
あるハープ演奏者のこと

二人とは見つけることのできないほど，見事にハープを演奏する師匠がいました。しかし彼は偏屈で誰からも好かれず，彼に演奏してくれるように，誰も頼むことができませんでした。しかし，旨く弾けない人がハープを演奏するようなことがあると，彼は我慢ができず，そのハープを取って，気の向くままに演奏しました。偏屈は好い結果にはならないものです。

1　原文は「次の話」となっているが，話の順序からして，前の話を指しているので，このように訳した。

第三百十四話　冗談
少しばかりラウテを弾ける人のこと

昔ラウテとオルガンの立派な奏者がいました。この人のところに，もともとラウテが弾けない人が習いにやって来ると，彼は五グルデンの報酬を求めました。しかし別の人が，「先生，私はラウテやオルガンがもともと弾けます。何もできない人と同じように，沢山お礼を差し上げる必要はありません」と言うと，この師匠は言いました。「あなたは十グルデン，倍の謝礼を払わねばならない。五グルデンはあなたに教えるためで，別の五グルデンは，以前にできたことを忘れさせるためにです。というのは，いつも昔の弦楽器の癖が出るからです。」

他の芸においてもこれと同じですが，美徳においても同じことです。悪徳に慣れた人が美徳を習おうとすると，まず悪徳の習慣をやめ，忘れなければなりません。このことがその人を不機嫌にします。ですから若い人々が悪徳に慣れる前に，美徳へと引き寄せなければならないのです。Quia anima est tamquam tabula rasa, in qua nil est depictum.（心というものは，何も描かれていない白紙のようなものであるから。）

第三百十五話　まじめ
自分の師を吊し首にしようとした王のこと

一人の王様がいました。子供の時家庭教師がついていて，その家庭教師は王を寛大に扱いました。王が大人になり，自分自身の事が分かるようになると，王は言いました。「私の先生がまだ生きているなら，吊し首にしたい。私の少年時代に彼は，私を許して罰しなかったからだ。今では遅きに失して，悪習を断つことができない。」

その後私たちは，政権を握ると少年時代に罰して教えたということで，自分の先生を殺した人々の話を読みます。この先生たちはこういう人々を見ると，その人たちを恐れ，悪人ネロが師のセネカに行なったことを思い出しました。

第三百十六話　まじめ
師の首を刎ねさせた王のこと

あるガラス職人がガラス工房から戻り，小さなグラスを持って来ました。それはシュヴァルツヴァルトのガラスのように緑色をしていました。彼はそれを王に贈り物としました。この王は，「私にどういうグラスを贈ってくれるのだろうか」と考えて，わざとそれを落としたのですが，ガラスは割れませんでした。しかし落ちて凹みました。するとこの親方はすぐに頭陀袋に手を突っ込んで，小さい鉄床とハンマーを引っ張り出し，鉛か錫であるかのようにそのグラスの凹みを叩いてのばしました。王はそのグラスを見て言いました。「親方，ガラスを叩いたり打ち出したりする技術を見つけたのですか。」「はい王様」と，彼は言いました。王は聞きました。「それを誰かに教えましたか。」「いいえ，まだ誰にも教えてはいません」と彼が言うと，王は，「それを誰にも教えてはならない」と言って，彼の首を切り落とさせました。ガラスを槌で打ったり叩いたりできると，銀よりも高価になるだろうと考えたのです。この話をバルトロモイスが，『事物の特性』の中のガラスの章で書いています。

第三十二章　禁じられたものが真っ先に気に入るようになること
Nitimur in vetitum semper cupimusque negata.（我々は常に禁ぜられたものを求め，而して拒絶されたものを欲す）

第三百十七話　冗談
玉葱を食べなかった婦人のこと

昔一人の婦人がいて告解をしようとしました。司祭が彼女に贖罪として与えたことを，彼女はやろうとしませんでした。司祭は言いました。「ところで，あなたは贖罪を何かしなければなりません。もともと食べない食べ物はありませんか。」婦人は言いました。「私は玉葱を一度も食べたことがありません。」司祭は言いました。「贖罪として，あなたが生きている限り，玉葱を食べてはなりません。」この婦人は一週間くらいは玉葱を食べませんでしたが，それがどんな味なのか，いつも玉葱を食べたくて仕方があり

ませんでした。それで一シェッフェルは十分ある量の玉葱を買い，一週間でそれを全部食べ，その後は，いつも玉葱を食べるようになりました。これが本当の贖罪を行なうことでした，無論蟹が歩くように逆ですが。

第三百十八話　冗談
禁を破った五人の女性の例

前の話のように，ある人が自分の妻に，壺の中のものを食べることを禁じました。その中には，有毒なものが入っていました。――またある人は，妻に梁に上ってはならないと禁じました。彼女はそこに上がって梁が折れ，落ちて間もなく死にました。――またある人は，妻に穴に指を突っ込んではならないと禁止しました。彼はその中に尖った針を打っておきました。それで針が指に突き刺さりました。――またある人は妻に泥濘に入ってはならないと禁止しました。そこは彼女の第一に好きな場所になりました。――またある人が妻に，暖炉の中に潜り込むのを禁止しました。彼女が潜り込んだ時，暖炉が彼女の上に崩れ落ちました。

第三百十九話　冗談
町の外へ一度も出なかったある年寄りのこと

フランシスコ・ペトラルカは，イタリアのある町にいた，七十代の男のことを書いています。この男は多分四十年の間，この町から外へ出たことがありませんでした。参事会のお歴々，偉い方々は復活祭のための茶番の準備をしようとして，くだんの男に人をやってこう言わせました。「われわれは，あなたが秘かに町を出て，敵の町と協議していることを知りました。つまりあなたは町を裏切ろうとしているかのようだ。」この男は神やすべての聖者にかけて，敵対関係のこの頃だけではなく，四十年以上にわたって町から出たことがなかったと誓いました。お歴々はそれを信じない振りをして，彼に町から外に出てその様な猜疑を招いてはならない，犯せば大罰を課すと禁じました。しかし三日過ぎないうちに，彼は町の外で捕らえられました。

イヴは林檎を食べることを禁じられ，他のすべての果実が許されたのに，彼女は禁じられた木からだけ食べました。Nitimur in vetitum

semper cupimusque negata.（我々は常に禁じられたものを求め，而して拒絶されたものを欲す。）

第三十三章　喜捨について

第三百二十話　冗談
鷹が雄鶏を持って行ってしまったので，聖マルティンにその雄鶏を捧げた百姓女のこと

フェーリックス・ヘメルリン博士が記すところによれば，とある村に一人の女がいて，聖マルティンに生きた捧げ物をすると約束しておりました。しかし女はその約束をずっと果さずにおり，おそらく一年か，二年ぐずぐずしていました。ある時，女は一羽の雄鶏に逃げられてしまいました。長いこと捜した後，女は雄鶏がある家の上にとまっているのを見ました。そこで女は雄鶏にしきりに呼びかけました。すると雄鶏はマルティン教会の上に飛んで行きました。それで女はまた随分長く雄鶏を呼びました。すると雄鶏は今度は鐘楼の上へ飛んで行きました。女はいつまでも雄鶏に呼びかけました。しかし雄鶏は降りてこようとはしませんでした。こうして雄鶏が鐘楼の上にしばらく留まっていると，一羽のはいたかだか，鷹だかがやって来て，雄鶏をさっと摑むと，彼方へ持って行ってしまいました。すると女は喚き出して，言いました。「ああ，聖なるマルティン様，私はあなた様に長らく借金をしておりました。ですからあの雄鶏を捧げ物としてお受け取り下さい。そしてこれで満足なさって下さい。」

死すべき最期の時になって諦めて，この女が雄鶏の場合にしたように，もはや自分で使うことができなくなった時初めて，修道院長に財産を委ねようとする修道僧たちに対して，フェーリックス・ヘメルリンはこの例を示しているのです。

第三百二十一話　冗談
レンズ豆の粥をやろうとしなかった百姓女のこと

ある時，百姓女がレンズ豆の粥を煮ていました。女は使用人たちに早く食事の支度をしてやらねばならなかったのですが，その時一人の貧しい病

気の巡礼僧がやって来て，女に，後生ですからお粥を一杯施して下さいと頼みました。僧は，それを食べたら元気になれるだろうと思ったのでした。女は僧に何もやろうとはせず，怒鳴りつけました。僧は再び去って行きました。そしてそのすぐ後で女はレンズ豆の粥の入った壺を持って，部屋へ運ぼうとしました。その時女は壺をぶつけて割ってしまいました。こうして女は粥を泥の中にこぼしてしまったのです。そこで女は先の巡礼僧を追いかけて呼び，来なさいな，お粥をあげますよと言いました。

腐ったり，痛んだりした時以外は，施し物として何も与えない多くの人々が同様です。例えば，気の抜けたワインがミサ用ワインとして捧げられます。主なる神は私たちに最上の物を下さるのですから，神には最上の物を捧げるべきであるのにです。あなたがある立派な方に何かを贈る場合，それがワインであろうと，林檎であろうと，葡萄であろうと，もしそれが痛んでいたら，それを見せられた人，またそれを見る人はこう言うことでしょう。「彼は，あなたにそれより良いものを何も与えるつもりがないから，おそらくいいかげんなことをしておいたのでしょう。」そして，あなたは名誉を得ると思っていたのに，恥辱を得たのです。神に対しても同様です。あなたがこの世で施し物として捧げる物を，神は天使たちや，聖者たちに，聖マルティンのマントをお示しになったように，示されることでしょう。そしてそれがみすぼらしい，惨めな物であれば，あなたはそれで恥をかくことでしょう。この世でも，あの世でも恥入る必要のないように捧げ物をしなさい。そしてあなたの家の中で，何も粗末にしてはいけません。主はこう言っておられます。「Luc. 11. Quod super est, date elemosinam.（ルカによる福音書第十一章，余分にあるものを布施として与えよ。）」

第三百二十二話　まじめ

王妃が刺繍を施した両袖を持っていて，オットーに贈ったこと

オットーという名の別のドイツの王様がおりました。王には奥方がありましたが，この人は全く偉大な喜捨婦人で，聖婦人でした。王はあるとき奥方に，おまえは貧しい人々にあまりにも多く持ち出してやってしまいすぎる。おまえは私を滅ぼすつもりか。程々にして，控えるべきだと小言を

言いました。ある時，大きな祝宴がありました。王は，奥方が一番上等の衣服を身につけるだろうということをよく知っていました。そこで王は奥方を試してやろうと思い，乞食の衣服を着て，教会の前の他の乞食たちの間に腰を下ろしました。さて，王妃がやって来ると，王は王妃の側へ寄って行って，施し物を求めました。王妃は王に何かを与えようとしました。その時王はこう言いました。「私はあなたの上着の刺繍をした袖以外には，何も欲しくはありません。」それは真珠や宝石で刺繍が施されていました。王妃は片袖を上着から切り取らせて，それを乞食にやり，再びマントを上着の上に着て，教会の中へ入って行きました。王は家へ帰り別の服に着替えて，自分も教会へ行きました。

さて，皆が食卓につき食事をしていた時，王妃は別の上着を身につけていました。そこで王は奥方に言いました。「妻よ，おまえが今日着ていた，もう一枚の上着はどこにあるのだね。なぜあの上着を脱いでしまったのかね。」奥方はひどく驚きました。王はその上着を見たがりました。奥方は悲痛に満ちて，それを取りにやらせました。上着が持ってこられると，どうしたことでしょう。上着には両の袖が付いていました。そして片袖は奥方が切り取らせた物と全く同じでした。王も驚いて，クッションの下にある，自分がもらった袖を引っ張り出しました。それらは瓜二つでした。それで王は奥方が聖婦人であるということがよくわかり，奥方に，好きなようにしたり，好きなものを施す権限を与えました。

というのは，慈悲は十字架の下で切り裂かれず，一人の人間を神に対して，そして人に対して慈悲深くする，イエスの上着だからです。

第三百二十三話　冗談

ピラートゥスがキリストの上着を身につけていたこと

ティベリウス王は，ピラートゥスが私たちの主キリストを十字架に掛けさせたというので，ピラートゥスに対して立腹していました。ティベリウスはキリストについて，キリストが一言で人々を健康にすると聞いていたのでした。ティベリウス王はピラートゥスのもとへ使いの者をやり，ピラートゥスを殺してしまおうとしました。ピラートゥスが王の所へやって来ると，怒りが王から消え去ってしまっていて，王はピラートゥスを親し

げに迎えました。ピラートゥスが再び王のもとから去ると，王はまた彼を殺したいと思いました。そして，ピラートゥスが王の所へやって来る時にはいつも，王はピラートゥスに対して何もしませんでした。このことが多分頻繁に起こったのでしょう。王は，どうしてそうなるのだろうかと尋ねました。するとある人が言いました。「王様，あの男はイエスの上着を身にまとっているのです。彼からその上着を脱がせてごらんなさい。そうすれば事態は変わるでしょう。」王はピラートゥスから上着を脱がせました。すると，王はピラートゥスに好意を持たず，憎むようになりました。

この上着は，ある人が役に立つ人で，そして神にも，世間にも何も与えないようなけちん坊でなければ，慈悲を意味します。その人がけちん坊だったら，人々はこう言います。「あのけち野郎，ペストにかかっちまえ。いったいあのけち野郎が祭壇へ行くのは，いつ見られることか。悪魔が死んだって，あいつは辛くないんだ。あいつには，祭壇の周りにパセリを蒔くのがいいだろう。あいつはそれらを踏みつぶしたりはしないだろう。あいつは滅多に祭壇へ行かないんだから。」

第三百二十四話　冗談

自分に百頭の雌牛をもらえるように，司祭に雌牛を一頭捧げた百姓のこと

かつて一人の貧しい百姓がおりました。この人はたった一頭の雌牛しか持っていませんでした。ある時，この百姓の妻が説教を聞いていましたが，夫はそこにおりませんでした。その時司祭が，誰か一頭の雌牛であれ，何であれ，施し物としてそれを捧げる人に，神はその代償として百頭お与えになるだろうと説教しました。妻は家に帰ると，そのことを夫に，司祭が説教したとおりに言いました。そして妻は，自分たちに百頭の牛が手に入るように，雌牛を司祭に与えようと助言しました。夫はそうすることにして，司祭の所へ雌牛を連れて行きました。司祭はその雌牛を牧場へ追いやる前に，しばらくの間家にとどめておきました。その後で司祭は，自分の雌牛が百姓の雌牛も家へ連れて来るように，二頭を繋ぎ合わせました。しかし逆になってしまいました。百姓の雌牛が，司祭の雌牛を百姓の家へ連れて行ってしまったのです。夕方になると，司祭は雌牛を二頭ともなくしてしまいました。そして雌牛たちがどこにいるのかを聞き知りました。司

祭は百姓の家へやって来て，二頭の雌牛を返すように命じました。百姓は言いました。「わしはあんたの雌牛など持っておらんよ。あんたが説教なさったことが本当なら，主なる神は，わしに百頭の雌牛を借金なさっておられる。そうして，わしにまだ九十九頭の借りがあるはずだ。」二人は揃って法廷へ出かけました。しかし，司祭は百姓に二頭の雌牛をやっておかねばなりませんでした。

第三百二十五話　冗談
ハンス・ヴェルナーのこと

この書物を書いている跣足修道会士のヨハンス・パウリ，すなわちこの私は，フィリゲンの学問師父をしていた時，ハンス・ヴェルナーという一人の無骨な百姓男と知己の仲でした。この男は文字が読めて，しかも聖書をほぼ丸ごと暗記していて，行く先々で神父たちと，「それは聖書の何処に書かれていますか」などと，議論するのでありました。あるとき，ヴュルテンベルク侯の館のあるシュッツガルトに出かけて行きましたが，博士たちはハンスのことを良く知っていました。しばしば博士たちの許をハンスは訪れていたのです。つまり畑の種蒔きを終え，穫り入れる物もない冬の間近になると，議論を交わすため，ハンスは出向いて来たからでした。殿様はハンスの言うことも聞きたいと思し召し，彼を客としてお招きになりました。学者たちが，聖書のうちからどの様なことを質問しても，ハンスは立派に解釈してみせましたので，殿様は御感遊ばされました。百姓のハンスは殿様に申しました。「お殿様，神様がどれほど大きなお方であるかご存じでしょうか。」殿様は言いました。「誰もそのようなことを私に話してくれようとしないのだ。」百姓は申しました。「神様はとても大きな方でございます。予言者の言うところでは，『空はわが椅子，大地はわが足置き』とのことでして，その両の腕を広げれば，天の一端から他の端まで届いてしまうのです。そこで，お当て戴きたいのですが，お殿様，神様がそのように大きな方であるならば，一着の服をつくるのに，どれくらい沢山の布地を必要としますでしょうか。」殿様は言いました。「そのようなことは，私には判らないな。」百姓男は言いました。「神様は私と同じ位しか必要となさいません。『汝らがわが名において貧しき者に施せるは，すなわち，汝

らがわれに施せるに等し』と，神様は仰せになっていらっしゃいます。ですから，もしもあなたが私に一枚の衣服を下さるならば，取りも直さず，あなたは神様に衣服を差し上げたのと同じ事になるのでございます。」殿様は言いました。「断食節の終わりの日曜日には，家臣の者に衣服を与えるによって，もしもお前もここに来れば，お前にも衣服を与えるであろう。」ハンス・ヴェルナーはこの幸運を取り逃がしませんでした。いったん旅立ちをしたあと，再度殿様の館に参り，同じように，衣服を分け与えられたのでありました。

第三百二十六話　冗談
二人の盲人が叫んだこと

ある時，城門の下に二人の盲人が立っていました。その門の上の大広間では，王様がテーブルに着いて，食事をしていました。王様にはそこの見通しが利き，出たり入ったりの人々が見えたのでありました。と，その時，二人のうちの片方の盲人が大声で言いました。「王様だか皇帝陛下だか存じませんが，もし合力してやろうとのお気持ちがありましたら，どれほど，この者が助かるか知れません。」すると，もう一方の盲人も大声をあげて言い始めました。「まことに，神様が手を貸して下さるのでしたら，この者にとって，どれ程の助けになるか判りません。」このように，二人の盲人は，皇帝陛下だか王様だか，その方の食事をしている間じゅう，代わる代わる叫んでおりました。殿様は，二人の者がどれくらいの強運を持っているのか試して見ようと思い，二個のパンを焼かせ，そのうちの一個には大枚のグルデン金貨を入れました。そのパン菓子は重くなりました。べつの物には沢山の骨を入れました。このパン菓子は軽くでき上がりました。その上で殿様は，自分に向かって呼びかけていた盲人に重いパン菓子を与えるように命じました。めいめいがパンを貰うと，盲人たちは連れ立って歩いて行き，互いにどんな分け前に与ったか尋ねました。片方の男が言いました。「俺にはやけに軽いパンを呉れたぜ。」もう一方の男は言いました。「そういえば，俺のはばかに重たいぜ。おもうにこれは燕麦パンだな。なあ，お互いに取り替えっこしようじゃないか。しょっちゅう耳にすることだが，パンは軽く，チーズは重くって言うぜ。」二人は取り替えっこしました。

翌日，後のほうの男が来て，大声で言いました。「ああ，王様が助けてやろうとの思し召しがありましたら，どれ程の救いになるか知れません。」一方の男はもはや姿を現しませんでした。たっぷり頂戴したのでした。殿様は出て来て，あのパン菓子はどうしたかと，盲人に問い質させました。この盲人は答えました。「あちらの男と交換いたしましてございます。私の物よりあの男の物のほうが軽かったものですから。」それを聞いて，王様は言いました。「神が救おうとした者には十分な助けがあったということで，かの盲人はさだめし喜んだことであろう。その方は何も得るべきではないのだ。今後もお前は貧しく暮らすのじゃぞ。」

第三百二十七話　冗談
お金の袋の前を通り過ぎた男のこと

前のお話で，良い目に遭わなかった盲人の場合と同様のことが，ある貧しい男の身の上に起きたのであります。貧しい男を親友に持つ人がおりましたが，彼はどこの誰からと知られることなく，何とかして救いの手を差しのべてやりたいものだ，と考えていました。それと，この友人が援助するに足る人物なのか，はたまた然らざる人物なのかを知りたくも思いました。そこで，一つの袋を取り出すと，グルデン金貨をいっぱい詰め，友人がいつも歩いて行く道筋で，外出した時にそれに気付くように，お金の袋を置きました。

さて，その友人は，歩いて行くほどに，一本の樹木のところにやって来て，そこで独り言を言いました。「どんなものだろう，俺は眼をつぶったままで，この木からべつの木まで歩いて行けるだろうか。」男は両の眼を閉じました。そして眼を閉じたまま，木から木へと歩いて行きました。それで，グルデン金貨の詰った袋の前を通り過ごしてしまい，男は袋が発見できませんでした。さて，金貨を袋に入れて道に置いたかの友人は，ゆっくりと男の後からついて行き，袋の金貨を見つけました。そこで，これらの金貨を哀れな男に見せ，その由来については素知らぬ態で，言いました。「君は何か見つけましたか。君は先に立って歩いて行ったのに，金貨の入ったこの袋が見つけられなかったのですね。私はずっと後ろから歩いて来て，見つけたのですよ。」それを聞いて哀れな男は言いました。「途中，眼をつ

ぶって歩いていたものですから。」その時，このお金の袋は，この男に授かるべきものではなかったのだ，この男は不幸せのままでいなければならないのだ，と友人は悟ったのでした。

第三百二十八話　まじめ
慈善家が宝物を見つけたこと

ローマに裕福な男がいました。この人には一人の息子と二人の娘がありましたが，子供たちには財産を分け与えてしまい，自分の財産の中からは，貧しい人々に喜捨をしたり，貧乏な人々や巡礼たちに無償で宿を貸したり，またどの人からも，やみくもに弁済を求めたりしなかったので，困窮の日々を送るようになり，自分の食事にもこと欠く有り様。それにも増して辛かったのは，己のが身の不足よりも，貧しい人々にもはや喜捨することも叶わぬことでありました。ある夜のこと，この人は半ば夢，半ば現つのうちで，こう語りかける声を聞いたのでありました。「汝の，貧しき人々に与えしは，これわが為なれば，いずちに赴かんも，われ，永く汝に報わん。隣人の許に行け。而して汝の葡萄園を，かれと彼我交換せよ。かれ喜びて汝の求めに応ぜん。かの者の園のま中に丘あれば，掘れ，汝ローマも購い得ざる財宝を見いだすべし。」その声を，この人は三晩続けてはっきりと聞いたのでありました。

男は隣に行き，交換をしました。隣家の男は言いました。「結構ですとも。私の葡萄園の方が価値が低いのですから，その埋め合わせはまた後から致します。」「いや，五分と五分ですよ」と，男は言いました。互いに証文を交わした後で，男は息子と娘を呼び寄せ，ことの次第を話しました。そして，みんなで堀り始めましたが，およそ数クラスターの深さまでも掘ったでしょうか，子供たちはうんざりして言いました。「お父さんは夢を見たんだと思うよ。」父親は言いました。「わしは神様を信じているんだ。瞞されはせんぞ。みんな，根気をだしなさい。」彼らは掘りました。そして二つの大きな石にぶつかりました。その石の一つは，中が凹んでいて，油の入った大理石の壺と，水の入ったグラスと，そして三つの宝石，すなわちザクロ石，エメラルド，サファイヤが，置かれていました。それらはとても大きな宝石でした。水はつまらない物と思い，撒き棄てました。とこ

ろが，水に触れた鍬や，鶴嘴や，熊手がすべて黄金になってしまいました。それは錬金術師たちが，彼らの秘術を用いて黄金を作り出す為に捜し求めていた水であり，怪蛇バジリスクの肉と血から蒸留されたものであったのでした。神様は，敬虔な人が贋金作りの疑いを掛けられぬよう，その水が撒き棄てられることをお望みになったのでしょうか。眼に，その男は油を塗ってみました。すると，四十年前と同様によく物が見えるようになりました。これは何でしょうかと，神父に尋ねたところ，これこそ最上の香油であると，その神父は答えました。男は宝石と香油によって，大層な財産をこしらえ，男も子供たちも再び裕福になりました。男は以前のように，貧しい人々に施しをし始めました。この人は主の出現の福音に従って，おのれの支出した物の百倍のお返しを受けたのでありました。

第三百二十九話　冗談

キリストが一人の伯爵の前に現れ，貰った衣類をそこにおくこと

私は，テーオバルドゥス[1]と名乗る，ブレーゼンジウムとカルノーテンジウム[2]の伯爵の話を読みます。当時最大の慈善家でした。これまで長い間無かったような恐ろしく寒い冬のことでした。ある時，伯爵が馬で外出すると，一人の乞食に会いました。乞食は裸同然でした。そこで，伯爵は言いました。「お前，何が欲しいかね。」乞食は言いました。「旦那，その外套を下さい。」伯爵は外套を与えて，言いました。「ほかに何が欲しいかね。」乞食は言いました。「旦那の着ている上着が欲しい。」伯爵は上着を与えて，言いました。「ほかに何が欲しいかね。」乞食は言いました。「旦那，ご覧の通り，私は頭を剃っております。旦那の被っている帽子が欲しい。」伯爵は言いました。「お前はわしをいやというほど困らせようというのかね。お前はわしから身ぐるみすっかり剝ぎ取った。帽子はわし自身が要るのだ。わしは頭が禿げている。帽子を被らないで帰るのは恥ずかしい。」伯爵がそう言うと，乞食の姿はかき消えて，そこには先程与えた衣類が置いてありました。そこで，伯爵は馬を下り，乞食に帽子も与えなかったことを悔やん

1　Theobaldus (1017？-1066)，炭焼き人の守護聖人。伯爵家の出。ルクセンブルクで隠者となり，カマルドール修道会士として死んだ。

2　Blesensium und Carnotensium. 地名か？　詳細不明。

で，泣き叫び始め，誰にでも，欲しいと言われる物はもう何一つ拒むまいと心に決めました。

第三百三十話　冗談
お慈悲で拍車を与える男のこと

一人の貴族がおりました。大の慈善家でした。ある時，馬で外出すると，大ぜいの乞食に出会いました。乞食たちは銘々何かを欲しがりました。貴族はその中の一人には上着を，もう一人には外套を，という具合に次々に何か与えました。あとから，一人の乞食が来て，拍車を欲しい，と言いました。貴族は言いました。「わしが家に着くまで，この馬を駆り立てる人を頼んでくれ。そうしたら，おまえにも喜んで拍車をやろう。」

第三十四章　祈りについて

第三百三十一話　まじめ
修道院長，取っ手の輪に心配事を掛けること

修道院の院長がおりました。晩になると，修道院の戸締まりをしました。修道院のこういう人々はいろいろ用事が多いもので，この院長も一日中走り回って，万事うまくいっているのを見届けたりして，世俗の管理のためにゆっくりとお祈りもできませんでした。さて，戸締まりがすむと，院長は扉の輪の所へ行き，それに鍵を掛け，心配事のすべてをその輪に委ねてから，さて神に向かい敬虔な祈りを捧げました。

これは誰にもできることではありません。しかし，自分のできる限りでなら，誰にでもできるのです。人が教会へお祈りに行こうとするときは，世俗の心配事は家に置き，いろいろの考え事にこう言ってやらねばなりません。「私をそっとしておいてくれ。今はほかにすることがあるのだから。」

第三百三十二話　冗談
その男，Miserere tui, Deus.（神よ，汝を憐れみたまえ）と祈ること

聖アンブロージウス[1]は，絶海の孤島に住むという一人の聖なる男の噂を

1　Sant Ambrosius（333頃-397），ミラノの司教。教会博士。

聞き，その島のあたりを通ってこの神の友を探そうという船に乗り込みました。聖アンブロージウスはその男のところへ行き，男が何かしゃべっているのを見て，何を祈っているのか，と尋ねました。その修道士は言いました。「私は，Miserere tui, Deus. としか祈ることができない。」聖アンブロージウスは言いました。「Miserere mei, Deus.（神よ，我を憐れみたまえ）と祈りなさい。Miserere tui, Deus. などと祈ってはいけない。それは間違っている。」聖アンブロージウスは船へ帰って，立ち去りました。修道士は祈りの言葉を忘れ，水の上を船を追って走って来て叫び，聖アンブロージウスを呼んで，祈りの言葉を忘れた，もう一度教えてくれ，と言いました。聖アンブロージウスは言いました。「さあ，行きなさい。そして，あなたが先程祈った通りに祈りなさい。」修道士は水の上を走って引き返しました。そこで始めて，聖アンブロージウスは，その男が聖者であることを悟りました。

第三百三十三話　まじめ
一人の女「主の祈り」[1] を唱えること

一人の女がおりました。いつも教会のうしろの席に跪いて祈り，信心深い余り涙を流していました。すると，一人の神聖な司教が上の二階席にいて，鳩が来てその涙をついばんで飛び去るのを見ました。司教はある時女の所へ行き，祈りながらあのように涙を流すとは，一体何を祈っているのか，と尋ね，鳩のことも話しました。女は言いました。「私は『主の祈り』だけしか唱えられないのです。」司教は言いました。「もしあなたがその上に詩編を，その中にある美しい詩を唱えることができれば，もっと信心深くなるでしょうに。」女はそれを習い覚えました。しかし涙はもう出て来ようとはしませんでした。それで，司教も，鳩が飛んで来るのがもう見られないので，女に，「主の祈り」をまた唱えなさい，と言いました。女がそれを唱えると，また涙が溢れ，鳩も飛んで来ました。

こういうわけで，「主の祈り」は最も貴い，最も有益な，最も短い祈りなのです。ですから，我がベギン会修道女や若い未亡人はいつも食料袋の中

1　原語 Paternoster（＝ドイツ語では Vaterunser）。『マタイによる福音書』第6章第9節にある祈りの言葉。「ロザリオ」の意味にも用いられる。

に「主の祈り」を入れておかねばなりません。この人たちは食料袋は持っているが，中にはスプーンとナイフと「主の祈り」を，と言ってもロザリオのことですが，入れているのです。ひょっとすると恋の便りも。

第三百三十四話　祈りについて　冗談
狼と狐とけちん坊のこと

ある時，一人のけちん坊と狼と狐が一緒に学校へ行き，勉強しようと思って，「主の祈り」を習い始めました。「いろは」はもう習っていたのです。すると，先生はけちん坊に言いました。「言ってみなさい。あなたは何ができるかね。」けちん坊は言いました。「わ，わ，われらがお金よ。」先生は，「あれはもっと勉強せねばならん」と言って，狼に言いました。「言ってみなさい。」狼は言いました。「わ，わ，われらが羊よ。」先生は狐に言いました。「言ってみなさい。」狐は言いました。「わ，わ，われらが鵞鳥よ。」みんな自分の頭にあることしか言うことができませんでした。

このように。ほかのことが頭にあれば，まともにお祈りのできない人が大ぜいおります。

第三百三十五話　まじめ
隠者の指，火をふくこと

ある時，一人の若い修道士が荒野の隠者の所へ来て，自分はほかの修道士のように敬虔に祈ることができない，と悩みを訴えました。隠者は跪き，天に向かって両腕を差しのべ，祈り始めました。すると，指の先が，まるで蠟燭のように，燃え始めました。しばらくそのようにして祈ってから，腕を下ろすと，指の火は消えました。そこで，隠者は若い修道士に言いました。「このように敬虔に祈ることができないなら，それができるように熱望しなさい。それを熱望することができないなら，熱望する心を熱望しなさい。それで十分です。」

神を愛するとか，罪を後悔するとか，ほかのことでも同じです。そうなるように熱望しなさい。そして，それを熱望する心を熱望しなさい。ダビデが「私の魂はあなたの掟を守るように熱望する心を熱望した」Psal.118. Concupivit anima mea etc.（「詩編」第百十八章　私の魂は熱望した。

云々。)[1] と言った通りです。

第三百三十六話　冗談
腕を折られ，その十字架像を自分の敵とした男のこと

ある時，一人の百姓が教会に入って来て十字架の前に座ると，キリスト像が釘で十分止められていなかったので，倒れて来てその百姓の腕を折りました。それで百姓は言いました。「悪魔に教会の中に連れ込まれたのか。おれは一年間，教会には来ないことにする。」彼は外科医のところに連れて行かれました。その後長い間彼の身内のものは，彼が二度と教会に入って行かないことが分かったので，彼を非難して，教会の中へ入って行かねばならないように，無理強いしました。彼は教会の扉のところに来ると，片方の目で中を覗き込んで，十字架にキリストの像がかかっているのを見ると，彼は言いました。「おれは教会の中に入って行って，お前の前で帽子を取り，ひざまずこう。しかし心の中ではお前を好きになる積もりはない。お前はおれの腕を折ったんだ。」

このように教会には沢山の人々がいます。しかし彼らが他の人よりずっと，神に好意を持っているというわけではない。彼らは頭を下げて，胸を叩いて後悔します。しかし教会から出て来るや否や，元の木阿弥です。彼らは朝，神のところへ足を引きずって行き，小昼の後は，悪魔のところへ走って行きます。こういう人は，ユダヤ人がキリストにやったように行います。ユダヤ人はキリストの前にひざまずいて，言いました。「ユダヤの王よ，ようこそ。」しかし彼らは，キリストを嘲笑していたのでした。この人たちも同様で，神が自分たちを許すように頼みます。しかし心の中では，またそれをやろうと思っているのです。このことは神を嘲笑したことなのです。

第三百三十七話　まじめ
貧しい男が金持ちのために祈ったこと

一人の日雇いがいました。彼は朝教会で手間取って，親方も雇主も持て

1 「詩編」118にこれに類する言葉はない。

なかったので，雇主を待つ場所に立って，仕事がないのを悲しんでいました。すると一人の金持ちがやって来て，そこにこの男が立っているのを見て，自分のためにもよく働いてくれたことを知っていたので，彼に向かって言いました。「どうしてそんなに暇そうにそこに立っているのだ。親方がいないのか。」この百姓は言いました。「はい，私は今日，当日ミサの後でさらにミサを聞こうとしました。それで遅くなって親方を持てませんでした。」，この金持ちは，「むろんこれは信心深い男だ」と思って，言いました。「今日は私のために働く気があるか。」この百姓は，「はい」と答えました。金持ちは言いました。「それならもう一度教会の中に入って，今日一日私のために祈ってくれ。そうしてくれれば，お前に食事を届け，畑で働いている他の者のように賃金をやろう。」この百姓は，喜んでまた教会の中へ入っていって，お祈りをしました。彼には他の者と同じように，食事が届けられました。仕事が終わる時刻になって，彼が親方の家へ食事に帰ると，金持ちの男が，他の者と同じように賃金を与えました。

彼が再び自分の家へ帰ろうとした時，一人の年老いた男に出会いました。それは天使だったのですが，この男に言いました。「お前があの金持ちの男のために祈ったことで，報酬として何をお前にくれたのか。」彼は言いました。「二シリングだよ。」この天使は言いました。「もう一度彼のところへ行って，もっと沢山くれるように言いなさい。彼はお前に支払いをしていない。」彼がそうすると，金持ちはさらに六シリングくれました。しかし年とった男は，彼に会うと言いました。「もっと沢山くれるように言いなさい。」彼はまたも金持ちのところへ行き，もっと沢山くれるように言うと，二十シリングくれました。その夜，この金持ちの男に啓示があったのでした。貧しい男の祈りがなかったならば，彼はこの夜，急死していたことでしょう。

第三百三十八話　冗談

穀物を貸して，主の祈りを覚えた男のこと

一人の金持ちの男がいました。彼が告解をする時に，祈りの言葉を唱えられるかどうか，聴罪司祭が尋ねました。彼は言いました。「いいえ，何度も覚えようとしましたが，一度も覚えられませんでした。」聴罪司祭は言い

ました。「読み書きはできるか。」彼は「いいえ」と言いました。聴罪司祭は言いました。「お前は穀物や金を誰に貸したか，どうして覚えておくのだ。」彼は答えました。「それはよく覚えておくことができます。」司祭は言いました。「お前は告解の代わりに，貧しい人に穀物を貸してやる気があるか。しかし支払いは収穫が済んでからだが。」彼は言いました。「はい，喜んで致します。」聴罪司祭は，彼の知らない貧しい一人の男を，彼のところに送りました。その貧しい男は言いました。「聴罪司祭が，あなたのところに行くように言われました。私に二ゼスター[1]穀物を貸してくれるからと。」金持ちの男は言いました。「何という名前だ。」彼は答えました。「『天におられます』と言います。」金持ちは訊きました。「お前の姓は。」彼は言いました。「姓は，『わたしの父よ』と言います。」一週間後に，聴罪司祭は別の貧しい男を彼のところに行かせ，こう名前を名乗らせました。「名は，『御名が崇められますように』で，姓は，『御国が来ますように』」と。この金持ちの男は，その名前をしっかり覚えました。聴罪師は，彼が名前を覚えたと思ったので，さらに別の男をやってこう言わせました。「名は，『御心が行われますように』で，姓は，『天におけるように地の上にも』」と。ずっとこんな風でした。その後聴罪司祭は，金持ちのところやって来て，穀物を貸したかどうか尋ねました。「はい」と彼は言いました。聴罪司祭は訊きました。「名前は何というのか。」彼は言いました。「最初の男は，『天におられます』が名で，姓は，『わたしたちの父よ』です。二人目は，名前が，『御名が崇められますように』で，『御国が来ますように』が姓です。」ずっとこんな具合でした。その時聴罪司祭が笑ったので，彼は言いました。「もし，なぜお笑いになるのですか。」聴罪司祭は言いました。「お前はお祈りができるからだ。名前だけを言いなさい。」するとこの金持ちは喜んで，貸した穀物を貧しい人々への贈り物とし，聴罪司祭にも司祭服を贈りました。

1　当時の穀量単位で，約15リットル。特にバーデン，アルザス地方で用いられた。

第三十五章　教皇について

第三百三十九話　冗談
教皇が人々の足を洗ったこと

洗足木曜日[1]に，教皇が十二人の貧しい人々の足を洗うという習慣があります。教皇が彼らの足をいい加減に洗い，十字を切り，キスした時，彼らの中の一人が言いました。「教皇様，足の指の間に宝物がありますよ。」教皇は笑って，他の者より沢山彼に与えるように命じました。

第三百四十話　冗談
復活祭前夜に，祭用のお菓子を食べることを教皇に願いでた伯爵のこと

ボヘミアの伯爵が，聖ペテロ教会と聖パウロ教会を訪れるためにローマへやって来ました。そのことが教皇の耳に入り，教皇は伯爵を呼び寄せました。伯爵は教皇の所へやって来ると，足元にひれ伏し，足に口づけをしました。すると教皇は言いました。「伯爵殿，さあ立ってこの私の横に坐りなさい。」伯爵は言いました。「こちらの足元の所で充分です。私は教皇のお傍に腰を下ろしてはならないのです。父は教皇のお傍に腰を下ろしたことはないのです。」教皇は答えました。「私の父も教皇の椅子に坐ったことはない。でも私は教皇の椅子に坐っているよ。」伯爵は教皇の傍らに腰を下ろしました。教皇は伯爵に王のこと，王の統治のこと，キリスト教の信仰のことなど様々な事柄について尋ねました。伯爵は教皇にいつも適切な情報を伝えました。最後に教皇は言いました。「伯爵殿，そなたがローマの教皇に拝謁したことが，そなたの国の者たちにも分るように，教会への恩寵と贖宥について何か所望するがよい。」伯爵は言いました。「教皇様，私どもの教会は，贖宥については充分与えられています。それで復活祭前夜，まだ菓子が温かい間に，祭用の菓子を食べてもよい恩寵をお願いします。復活祭当日になると，美味しさの点では，前の晩には遙かに及ばないもの

1　復活祭前の木曜日で，キリストが最後の晩餐に使徒の足を洗ったことを記念する日。緑の木曜日ともいう。

ですから。」教皇は笑って言いました。「四旬節の間ずっと待ったのなら，夜もついでに待ちなさいよ。」

第三百四十一話　冗談
おならをした弁士のこと

教皇の前で，ある男がある時，フローレンスの住民のために弁ずることになっていました。その弁士はとても太っていました。弁士が深々とお辞儀をした時，教皇の前で思わずおならを漏らしてしまいました。すると弁士は振り返って，お尻に向かって言いました。「お前が喋りたいなら，おれは黙っているぞ。」そこで教皇は笑って，弁士がとても礼儀をわきまえていたため，弁士がそこで手に入れようとしていた物をすべて与えました。

第三百四十二話　冗談
簡潔に話す理由を明らかにしようとした男のこと

ある都市で，一人の弁士が教皇の前で話をしました。非常に話が長かったので，その場にいた教皇や他のお偉方たちは，うんざりしました。そのため弁士は，今回その都市に関わる事柄を話し終えることが出来ませんでした。別の日の別の時間が決められました。教皇は弁士に，話を簡潔にして長くならないよう伝えさせました。弁士は教皇の前にやって来ると言い始めました。「教皇様，簡潔にお話しようと思います。簡潔に話さねばならぬことを九十二の理由で明らかにするつもりです。」教皇は弁士の望む全てのことを大目にみてやったので，教皇は弁士の言うことに耳を傾けなくてすみました。

お偉方とは，ほんの僅かだけ簡単に話すのが良いと言われます。とりわけ理解の良い人とはそうです。でも蠅を捕らえようと願っているかのように，口を開けているお偉方も沢山います。そういう方に理解して頂くには，多くの言葉を使うことが必要なのです。

第三百四十三話　冗談
馬で行く教皇ヨハネのこと

教皇で殉教者であった聖ヨハネが海を渡って行くと――聖徒物語に述べ

られているように，当時聖ヨハネはそうしなければならなかったのですが——うまく歩けませんでした。彼は年をとっていたのです。そこで聖ヨハネはコリントへやって来ると，一人の貴族に馬を貸してくれるように頼みました。当時は聖者たちは徒歩で出かけたのです。貴族は言いました。「妻の馬をお貸しします。馬は役に立ちますよ。でも馬はお返し下さい。」馬はその聖なる方を運んだ後は，もうどんな人も運ぼうとはしませんでした。

アレキサンダー大王もまた馬を飼っていましたが，その馬もまたアレキサンダー大王以外，誰も背中に乗せなかったのです。王がやって来て馬に跨ろうとすると，馬は王がうまく乗れるように膝を曲げました。馬が死ぬと，大王は馬に敬意を表して町を建設しました。その町はN某という名前でした。この話を宗教に引き当てればこうです。我々の身体の中に神が宿らなければならないならば，我々はもう悪魔を乗せたり，悪魔の敷物になってはいけないのです。

第三百四十四話　冗談
十字の祝福を望んだ老女のこと

ある時教皇が馬で出かけました。すると年老いた女の乞食が，教皇のところへやって来て，どうか一シリング恵んで下さいと頼みました。教皇は言いました。「いや，それは多すぎるよ。」女は言いました。「では一プラファルト恵んで下さい。」教皇は言いました。「いや，駄目だ。」女は言いました。「では一クロイツァー恵んで下さい。」教皇は言いました。「いや，駄目だ。」女は言いました。「私のために十字を切って下さい。」教皇はその女のために十字を切りました。女は言いました。「あなたの十字が一ヘラーの価値があるなら，あなたは私に十字の祝福も与えはしなかっただろう。」こう言って女は立ち去りました。

第三百四十五話　冗談
ベルガモによる福音のこと

イタリアに二つの小さな町がありました。一つはルカという名前で，いま一つはベルガモという名前でした。ベルガモの人たちがルカの町に用事があり，参事会から何人かが，ルカの町へ送られました。その人たちがあ

る時教会にいると，ルカによる福音書が読まれるのが聞かれました。福音が自分たちの町ベルガモの名によらないで，ルカの町の名によって歌われることになっているのが，ベルガモの人たちには不愉快でした。そこで彼等は，自分たちの町がルカの町と同じ位の価値があり，福音が自分たちの町に因んでも読まれるべきだと思いました。ベルガモの人たちは故郷へ帰ると，その件を参事会に持ち出しました。参事会の人たちもその件で意見が一致し，教皇からその件の了承を得るために，参事会から三人をローマへ送ることにしました。

三人がローマの教皇の所へやって来ると，実際そういう際には敬意を表すべきであるのに，教皇に敬意を表することなく，粗野な百姓や素朴な人たちのような態度で教皇にその件を申し出ました。教皇は彼等に宿へ戻るように命じ，明日，晩拝式の時刻にもう一度来るならば返答を与えよう，と言いました。同時に教皇は，小さな低いドアを作らせました。中へ入るにはそこを通らねばならないし，また教皇の前ではお辞儀をせざるをえないようになっていました。朝三人は風呂に出かけ，その後身体がこざっぱり見えるように，白いシャツを身につけました。さて三人が教皇の屋敷にやって来ると，ドアが見当りません。どこから入ったら良いのかと尋ねました。門番は言いました。「その小さなドアを通って，中へ入りなさい。」三人は顔を見合わせました。一人が後向きになって中へ入って行きました。ドアがとても低かったので，上着とシャツが一番高い梁に引っかかったままになりました。そんなふうにして中へ入ったのでした。次の人も同様に後向きに中へ入り，三番目の人も同様でした。こうして三人ともお辞儀をし身を屈めてドアを通り抜けたのです。教皇は笑って，私はこの件は今まで通りにしておくつもりだ，ルカは聖人の名前なのだ，と彼等に言いました。

第三百四十六話　冗談
教皇が金貨をガチャガチャ鳴らしたこと

金持ちの男がいました。男は教皇に大切な用件がありましたが，それは必ずしも正当とは言えないものでした。その件がうまくいくように，男は教皇の所へやって来て，四百ドゥカーテンを教皇の膝の中へ押し込みまし

た。教皇はそれを膝の中でガチャガチャ鳴らして言いました。「甲冑をつけた兵士たちすべてに，誰が逆らうことが出来るだろうか。」

第三百四十七話　冗談
教皇の前へまかり出た男のこと

ある遍歴職人がローマのドイツ人経営の宿屋へやって来ました。その遍歴職人もドイツ人でした。夕食のテーブルでその男は言いました。「女将さん，明日私がローマ教皇様のもとに参上し，面談するのを手助けしてくれる人はいませんかね。」女将は言いました。「私はここに三十年住んでいますが，まだ一度も教皇様と話したことなどありません。あなたは来たばかりで，すぐに教皇様の前へまかり出るつもりですか。私が教皇様とお話しできるようにしてくれる人がいたら，私はその人に百グルデンさしあげますわ。」遍歴職人は言いました。「女将さん，その言葉を忘れないでくださいよ。」女将は言いました。「ええ，忘れませんとも。」

その後まもなく教皇は礼拝堂でミサを聞きました。例の遍歴職人もそのなかに入り込み，ミサを聞いていました。聖体が持ち上げられたとき，遍歴職人は聖体と聖盃に背を向けました。教皇はそれを見て不思議に思い，この男の信仰心が弱いのだと思いました。ミサが終わると教皇は男を呼んで，男がとった態度はどういう意味なのかと尋ねました。遍歴職人は答えました。「宿の女将さんがあのようにせよと言ったのです。」教皇は女将を呼びにやり，なぜお客にあんな祈り方を教えたのかと尋ねました。女将は，そんなことは言った覚えがない，と懸命に否定しました。二人が宿に戻ると，遍歴職人は言いました。「女将さん，百グルデンいただきましょう。教皇様とあなたは互いに言葉を交わしたのですから。」かくして女将は男に百グルデン支払うはめになりました。

第三百四十八話　まじめ
天国へ行けなかった教皇のこと

ある時教皇が病気になりました。そこで教皇はお付きの司祭に，告解を聞き，罪と罰を贖宥し得る権限を与えました。その教皇は死にましたが，天国へは行けませんでした。その後教皇は悲しげな顔をし，ひどい身なり

で司祭のまえに現れました。司祭は，あなたは教皇様でしょう，と尋ねました。教皇は答えました。「そうだ。」司祭は尋ねました。「どうしてそんなみじめな恰好で私のまえに姿を見せるのですか。」教皇は答えました。「私は天国へ行けなかった。」司祭は言いました。「何故でしょう。だってあなたは，赦免に加えて完全な贖宥を手に入れたではありませんか。」「そのとおりだ。」と教皇が言いました。「しかしキリスト様がその贖宥をお受け取りにならずに，認印をお押しにならなかったのだ。」この話を書いているヤーコブス・カルトゥージェンジス博士[1]は言っています。Si inviridi ligno, id est in capite, hoc sit, in arido quid erit, in subdito（もしも緑の木，即ち上位においてそれが生じるならば，それは不毛の木，即ち下位においても生じる。）

第三十六章　罰について

第三百四十九話　冗談
玉葱を五十個食べようとした百姓のこと

或る百姓が領主の意に反する行いをしました。領主はその百姓を捕らえさせ，三つの罰から一つを選ぶように命じました。五十個の生の玉葱を食べるか，素肌の背中に鞭打ちを五十回受けるか，五十シリング支払うかをです。その百姓は裕福だったのですが，こう言いました。「玉葱を食おう。」百姓は玉葱を三個か四個食べると，もうそれ以上は食べられませんでした。玉葱が鼻についたのです。そこで百姓は鞭打ちを受けようと言いました。鞭打ちを三回か四回うけると，百姓はやっと金を払う気になりました。

第三百五十話　冗談
三本のパセリを食べた驢馬のこと

ある時驢馬が三本か四本のパセリを塩もつけないで食べたとして，ライオンのもとに告発されました。そこでライオンは，驢馬がどうしようもない大食漢だったとして，死刑にしました。しかし羊や山羊を何匹も塩なし

1　詳細不明。

で食べた狼に，ライオンは何も咎め立てしませんでした。

こうしたものなのです。大泥棒には何の仕置きもなく，小悪党は絞首刑に処せられるのです。大泥棒が小悪党を縛り首にしますが，大泥棒の考えでは死に値する罪悪が，他の人々には許される罪であり，第三の人々にとっては正しいことなのです。Dat veniam corvis, vexat, censura columbas.（検閲は悪人を放任して，無実の民を苛む。）

第三百五十一話　まじめ
アレキサンダー大王が盗賊を捕らえたこと

アレキサンダー大王はある大海賊の噂を聞き，その海賊を捕らえさせ，なぜ海賊になったのかと尋ねました。海賊は答えました。「俺は貧しく，食っていくために小舟を奪うので，海賊と呼ばれている。お前は力にものをいわせて国，町，城を奪うので，王と呼ばれている。」アレキサンダー大王は言いました。「それならばお前がもう海賊と呼ばれないようにしてやろう。」そしてその海賊を隊長に任命し，騎兵二百を委ねました。

泥棒がある伯爵の領地で，またはある町で捕らえられ，その伯爵が盗品を奪って，その泥棒を縛り首にするならば，二人のあいだに何の違いがあるでしょうか。泥棒は不当で，盗品を奪う領主は正しいと言えるでしょうか。盗品はもとの持ち主に返されるべきです。しかしそうはされないので，大泥棒が小悪党を縛り首にすることになるのです。財産を奪う領主も泥棒なのです。盗みとはどんなことでしょうか。Furtum est contrectatio rei aliene invito domino.（その物の所有者の意見に反して，他人の物を窃盗の意思にて詐偽的に取り扱うことは窃盗なり。）盗みとは，持ち主の意志に反して他人の物を使うことにほかなりません。

第三百五十二話　まじめ
短刀のせいで縛り首になった男のこと

ある時ひとりの男が旅行中に銀製の短刀を一振り拾いました。別の男がやって来て，前の男に銀製の短刀を見なかったかと尋ねました。男は，いや，見なかった，と答えました。しばらくして，ある男がお金のはいった財布を落としました。その道には前述の男のほかには誰もいませんでし

た。この男は捕らえられました。男は盗みを懸命に否定し，自分はお金を拾わなかったと言いました。その男は引き出され，縛り首にされようとして十字架のところまで来たとき，こう言いました。「主イエス・キリストよ，あなたはご存じです，私が今日無実の罪で死に行くことを，私がお金を拾っていないことを。」その時どこからともなく声がして，こう言いました。「財布のせいではない。銀製の短刀のせいだ。」

帰せられた罪のせいではなく，過去に犯した罪のせいで，天罰がくだるということはよくあることです。神慮は測りがたく，わかりにくいものです。すべてはこの世かあの世で，場合によってはこの世とあの世で罰せられることになるのです。

第三百五十三話　まじめ
帯刀した男が自刃したこと

昔ローマにいたある男が，ローマの市参事会で，次のような提案をしました。「市参事会へ入る者は，何人たりとも武器を携えて入室してはならない。武器を帯びて入室する者は，斬首さるべし」というのです。この参事会員は，公共の福祉のため，長い間旅に出ていて，再び帰宅して参事会に出席しました。その時この男は例の規約を忘れ，腰に剣を帯びて出席しました。このように参事会に出た男に隣席の者が，「あなたは規約を忘れましたね」と，注意した時，この参事会員はひどく驚き，「これは罰せられなければならない」と言って，剣を抜き放ち，それに身を伏せて，この悪例を見習う者がないようにと，自刃して果てました。

第三十七章　執事について

第三百五十四話　冗談
執事が四十グルデンと書いたこと

ある領主が一人の執事を抱えていました。領主は執事相手に会計の締めくくりをしようとしましたが，その執事は会計報告ができませんでした。そこで領主は，「お前が書類でわしに会計報告するように，一週間の期限を与える」と言いました。執事はその通りにして，帳簿を開いて読み出しま

した。「一つ，芥子の代金四十グルデン。」そこで領主は，「もうよし。お前に会計報告して貰わなくてよい。わしはお前に総額いくら払えばよいのか言ってくれ。芥子を四十グルデン平らげたのなら，先ず肉をいくら平らげたのか」と言いました。そして領主は，会計報告を持とうとはしませんでした。

第三百五十五話　冗談
袋で計算すること

昔，読み書きのできる執事を数多く抱えていた領主がいました。この領主は執事たちが誠実に自分の仕事をやっていないことを知って，読み書きのできない無骨な百姓を雇い入れました。この百姓は執事職を引き受けて，大きな袋を作って貰いました。その袋には仕切が二つあった。その一つの仕切の中へは，儲けた分と残った分を入れ，もう一つの仕切の中へは受け取った金を納め，命じられた主人の為の支出をその袋の中から正直に支出しました。一年が経った頃主人が，「執事よ，勘定しよう」と言いました。執事は主人に袋を投げ出して言いました。「殿様，袋を相手に勘定して下さい。」領主が金を数えますと，百グルデン以上の残金がありました。実に執事の誰もが持たなかった額でした。

第三百五十六話　冗談
口と尻を示した男のこと

両親に死に別れた子がいました。そこで，参事会のお偉方たちは，その子の財産を殖やしてやるようにと，その子に後見人をつけてやりました。一年が過ぎた頃，お偉方たちは，その子の財産の会計報告を求めました。その後見人は会計報告ができず，ためらっておりました。お偉方たちは後見人にある一日を指定し，その日には遅滞なく参事会に出頭し，財産の行方の一部始終を示すように命じました。その日が来て後見人が参事会に出頭した時，その男は口を開け，それから口を閉じ，次にお偉方たちにお尻を示しました。口は財産の始めで，お尻はその終わりでした。後見人が財産をすっかり食べつくしたのです。財産は上から入って，下から外へ出たわけです。

第三十八章　医者について

第三百五十七話　冗談
堆肥を積んだ荷車を見た男のこと

ある貴族が病気になり，ほかの町の医者を迎えにやりました。その医者が来て病人の脈を見て尿をとり，その貴族に欠けているのは笑いだけで，いつたん喜んで笑えば治ると見立てました。医者はこのことを下男に告げ，お前さんたち主人を笑わせることはできないかと尋ねましたが，下男たちは何も知りませんでした。この医者は下男たちと話をし，ある村の農夫で実は評判の医者のことを主人に話して，主人がその医者を迎えに人をやるように打ち合わせました。貴族はそうしました。農民の服装をしたその医者が貴族の許へ来て言いました。「尿を見なければなりません。」貴族は尿をとりました。その農夫は窓辺にたって尿をじっと眺めて，「殿，あなたが病気なのは怪しむに足りません。堆肥を積んだ荷車と二匹の馬，それから鉄の熊手を持った一人の下男を体の中に持っています」と言いました。貴族は言いました。「わしには悪魔が憑いている。」医者は言いました。「その通り。それを信じたくなければ，こちらへ来て自分でよく見て下さい。」貴族はベッドからさっと起き上がって尿をよく見ると，その通りに見えました。そこで鎧戸から外を見ると，下男が中庭に立ち堆肥を積んでいるのが見えました。この荒っぽい説明を聞いて，貴族は腹の底から笑いだして，もう止めることができず，病気は治りました。

第三百五十八話　冗談
ある男ティートゥスの病気を治したこと

ヴェスパジアーヌスとティートゥスがイェルサレムの手前で宿営していた時，ローマ人たちはヴェスパジアーヌスを迎えに人をやりました。ヴェスパジアーヌスが来た時，ローマ人は彼を皇帝に選びました。そのころ一人の男がイェルサレムにいたティートゥスの許にやって来て，「あなたの父上が皇帝になられました」と言って，使い賃を貰いました。ティートゥスは喜びのあまり病気になりました。医者が迎えられてその見立てでは別

に悪いところはない，ただ心から怒れば治るだろうということで，医者はティートゥス様が憎んでいる者が従者の中にいないのかと尋ねました。すると誰かが，同じティートゥスという名の騎士がいるが，ティートゥス様はその男を見ることも，その声を聞こうともしないと，医者に申したのです。医者は皆の者たちと話し合い，医者がその騎士をティートゥスの前へ連れて来させ，ティートゥス様が言いつけることを誰もしないと申し合わせました。その騎士がティートゥス様の許へ連れられて来た時，ティートゥス様は大変怒り，従者たちに剣で騎士を刺せと命じました。誰もそれをしようとはせず，皆の者は聞こえない振りをしていました。そのあとティートゥスは憤怒の余りベッドからはね起きて，その騎士に迫ろうとしました。そこで従者たちはティートゥスを押さえ，その騎士に天幕から外へ出るようにと指図しました。怒りがティートゥスから消えた時，病気は治りました。ティートゥスに医者が，ティートゥスという名の騎士が病気を治した次第を語った時，ティートゥスはその騎士が好きになり。その男なしでは何事もやれなくなってしまいました。